近世内裏の空間的秩序

—承明門, 日・月華門の性格からの検討—

SPACE ORDER OF THE IMPERIAL PALACE IN THE EDO PERIOD

—Study on the characters of the Shomeimon, Nikkamon, Gekkamon—

飯淵 康一*, 永井 康雄**, 吉田 歓***

Kouichi IIBUCHI, Yasuo NAGAI and Kan YOSHIDA

On the gates of the Imperial Palace in the Edo Period, the following points were clarified.

1. The Shomeimon in the Imperial Palace, built in the Keicho era, had formal characteristics while the Gekkamon had informal ones.
2. The South gate in the Imperial Palace in the Keicho era, was built for the Enthronement.
3. Shomeimon and Nikkamon built in the Kansei era were used properly according to the kind of ceremonies as well as the Heian Palace.
4. The space of the Imperial Palace in the Edo Period are characterized by the ambiguities of the owning region of the Emperor.

Keywords: Edo period, Imperial Palace, Shomeimon, Nikkamon, Gekkamon

江戸時代、内裏、承明門、日華門、月華門

序

我国近世期の内裏はそれ以前の中世期の内裏に対し、南門を持つ点に於いて大きく異なっている。慶長18年(1613)、徳川氏によって造営された慶長度内裏から宝永度内裏に至るまでの内裏はそれ以前の内裏と異なり、南面築地塀に承明門として使われた南御門を開いていた。また、形式復古が意識され寛政2年(1790)に建設された寛政度内裏も南庭を囲む回廊の南面に承明門を、その外側の南面築地には南御門を設けていた¹⁾。

ところで図-1²⁾は、宝永度内裏で行われた桜町天皇の大嘗祭に伴う辰日節会の一場面である。公卿らが南庭に列立するため、画面中央の穴門より一旦外に出、改めて画面右上の南御門より参入する様子が描かれている。一見不可思議なこの様な経路を公卿らは何故辿ったのであろうか。また復古が企てられた寛政度内裏は里内裏建築史上どの様な意義を有するのだろうか。本論では近世内裏に於ける南門としての承明門と南庭東西に設けられた日・月華門を採りあげ、これらの儀式時に於ける性格を明らかにし、平安宮内裏のそれと比較することによって、主たる儀式会場となった紫宸殿廻りの空間的な秩序について考えてみたい。また、慶長度内裏の南門復活の要因についても検討を加えたい。これらを明らかにすることにより上記の疑問点に答えることにする。

第1章 慶長度、寛永度、延宝度、宝永度内裏の承明門と月華門

徳川氏によって造営された慶長度内裏の紫宸殿廻りの建築配置を見ると、紫宸殿の西側に軒廊を介して陣座、宜陽殿が連なり、南庭の東西には相対して、日・月華門が配されている。また、南庭に面する南築地には、それまでの中世内裏には見られなかった南御門が外界に対して開かれている(後掲図-4³⁾参照)。この南御門は『寛永御即位記略』⁴⁾に、「承明門ハ則南御門の事なり」とされるように、多く承明門として用いられた。この内裏は南北朝期の「西礼」⁵⁾の内裏、土御門東洞院内裏の敷地を引き継いだ関係上、陣座や宜陽殿を平安宮と反対側の西側に置き、従って儀式時には日華門に代わり月華門が重要な役割を果たした。慶長度内裏では儀式によって、公卿らの参入口として承明門を使う場合と月華門を使う場合とがあった。

慶長度内裏のこの様な紫宸殿廻りの構成は次の寛永度内裏に引き継がれ、さらに承応度、寛文度、延宝度、宝永度内裏でも基本的には同様であった。

本章では、得られた史料の関係から慶長度、寛永度、延宝度、宝永度の各内裏について紫宸殿が中心となった儀式を採り上げ上記諸門の用法を明らかにしその性格を検討することにする。なお退出時については用例が少ないので参入時のそれを扱うことにしたい。

まず、承明門として使われた南御門から見てみよう。近世内裏に於

* 東北大学大学院工学研究科 教授・工博
** 東北大学大学院工学研究科 講師・博士(工学)
*** 東北大学大学院工学研究科 助手・博士(文学)

Prof., Graduate School of Engineering, Tohoku Univ., Dr. Eng.
Lecturer, Graduate School of Engineering, Tohoku Univ., Dr. Eng.
Research Assoc., Graduate School of Engineering, Tohoku Univ., Dr. Litt.

図-1 桜町天皇大嘗会辰日節会絵巻(部分)

いても平安宮内裏と同様「元日節会」を初めとする年中行事の諸節会が行われていた。「元日節会」は、正月朔日に紫宸殿に御座す天皇が公卿らに對し行った宴のことで、公卿らは南庭に参入、列立の後、紫宸殿に昇り饗座に着く。平安宮に於いては、当初公卿を含め五位以上が参加したが後期になると公卿のみの参加となった⁶⁾。

慶長度内裏について『資勝卿記抄』⁷⁾元和5年(1619)正月1日条は以下の様に記している。

元日節会(晴)⁸⁾…(中略)…諸卿著伏座、三條大納言、烏丸中大納言、西園寺中納言、平宰相等也、…(中略)…次諸卿出、外辨諸司幄ニ著了、…(中略)…天皇出御、…(中略)…次開門、陣官人申子細、次閤司着、…(中略)…次召舎人(二言)、少納言就版、次宣、太夫達召セ、次少納言稱唯出召、先外辨入承明門、月華門ノ南ノ方へ寄り、諸卿鴈列南上、東面ナリ、無揖、次公卿参列庭中ノ標、東上北面、異位重行有揖、…(中略)…次外辨著堂上座

即ち、外弁公卿⁹⁾たる三條大納言以下平宰相等は陣座(伏座)を起つて、外弁幄に着いた。天皇出御の後、承明門の開門があり、女官たる閤司が着座した。次いで、外弁の公卿等は承明門より参入して南庭に列立、紫宸殿の饗座に着いたのである。外弁幄の位置については記されず、他の節会の例を見ても明確には知られない。然しながら幸い後述する明正天皇即位の図面¹⁰⁾にこれと覚しきものが描かれており、月華門の外側、西南方に設けられていた。閤司座の位置についても特に記されないが、平安宮内裏や、やはり後述する寛政度内裏の例¹¹⁾を見ると承明門内部の両脇に、また中世期の里内裏、閑院でも承明門代とされた日華門内に設けられていたから¹²⁾、この場合も承明門内両脇に設けられたものと思われる¹³⁾。

正月七日の「白馬節会」の場合は白馬渡があり、正月十六日の「踏歌節会」では舞妓による舞がある点で「元日節会」と異なるが、諸記録によればこれらに於いても公卿らの参入経路は同様であった。

「立后」は皇后を冊立することで、平安宮では公卿のみならず四位・五位そして六位以下も参加したが次第に五位以上のみとなり、遂には公卿のみの参加となった¹⁴⁾。南庭に参入した公卿らに對し宣命を宣読することで儀式が成立する。延宝度内裏で天和3年(1683)2月14日に行われた房子立后を『兼輝公記』¹⁵⁾に窺うと、

及辰刻事始、右大臣(兼依蒙仰、直著端座、)葉室大納言・勸修寺大納言・今出河中納言・正親町中納言・左兵衛督・重條朝臣等著伏座、…(中略)…右府仰可著外辨由於葉室大納言、々々微唯、…(中略)…此間外辨公卿著外辨、…(中略)…右府仰開門、(陣官申開了由、)右府仰閤司、(陣官申著座由、)…(中略)…右府仰刀禰、少納言稱唯、出承明門代、召外辨、公卿ら(外辨公卿雁行月花門南腋、)外辨参列標下、(東上北面、異位重行、)…(中略)…宣制一段、群臣再拜、又一段、群臣再拜、

と記される。葉室大納言以下外弁の公卿らは伏座(陣座)を起ち外弁(幄)に着いた。承明門の開門の後、閤司が着座、次いで公卿らは(承明

門から)南庭に参入し列立している。

これら公卿らの参入の経路については「立太子」の場合も同様で、宝永度内裏で行われた享保13年(1728)6月11日の昭仁親王の例¹⁶⁾により知ることが出来る。

ところで、これら儀式に参加した公卿らは陣座、外弁幄から、具体的にどの様な経路を辿り外界に開く承明門より参入したのであろうか。

「即位式」の例によりこの様子をやや詳しく知ることが出来る。「即位式」に於いても公卿らは外弁幄を起ち承明門から参入している。宝永7年(1710)11月11日、宝永度内裏で行われた中御門天皇の「即位式」について『御即位記』¹⁷⁾は以下の様に記している。

外弁の公卿座を立て月華門より入承明門の脇を出南門より入りて版位に着り承明門とは南門の事なり常には幄の南築地の傍らを通りて南門に入なり月華門を通らず

同様の記述は慶長度内裏で寛永7年(1630)9月12日に行われた明正天皇の『寛永御即位記略』にも見ることが出来る。公卿らは外弁幄から月華門を入り承明門の脇を出て南門より入ったが、通常は月華門を通らないと言うのである。他の「即位式」の記録には月華門を通過したとされないでこれらの場合の特例だったのだろう¹⁸⁾。

ところで、上掲記録には承明門と南門とは同じものとなるので、公卿らはこの門の脇を出て、またこの門より南庭に参入したことになる。これは一体何を意味するのだろうか。慶長度内裏、元和5年(1619)正月1日の「元日節会」について『資勝卿記抄』に興味深い指図が収録されている(図-2)。紫宸殿の南庭に左、右近の陣と共に内弁・外弁の公卿の列立の位置が示されているが、注目されるのは、祿所が設けられた承明門¹⁹⁾の西南方に穴門が存在していたことである。この穴門は指図にも描かれ、例えば『慶長度内裏指図』²⁰⁾(図-3)には小門と記されている。公卿らは外弁幄を起った後、南行し南築地に沿って東行、この穴門(小門)を潜って一旦外に出、改めて承明門より南庭に参入したものと思われる。近世内裏に於いては、大嘗祭に伴う諸節会も行われる様になったが「辰日節会」も同様であり、「序」で紹介した桜町天皇についての絵巻も実はこの様子を示したものであった。一見トリッキーなこの経路の意味については第4章でさらに検討することにする。

扱て、次に月華門について検討を進めよう。承明門の場合と同様「元日節会」を初めとする諸節会に於いて使われている。『通見公記』享保20(1735)年正月1日条からは宝永度内裏での「元日節会」の様子を知ることが出来る。

今夜節會雖不雨降、依地上濕(自昨夜至今日晚頭降雨、入夜天晴、)御裝束被用雨儀、戌終刻左大臣以下着陣、(源大納言・新中納言・式部權大輔等着、)其儀如恒、畢左大臣・源大納言等退出、(相府豫被命可

図-2 元日節会の指図(慶長度内裏)
但し、一部字を拡大し書き入れている

有早出、且源大納言間可早出之間、下官自謝座可行内辨之事之旨、) 亥終剋天皇出御、…(中略)…次願座下仰云、開門仕レ、(陣官告開門之由、)次願座下仰云、闔司ハ罷リ寄ヌルカ、(陣官告闔司着座之由、)…(中略)…次外弁公卿入月華門列立宜陽殿土庇、(陣官告公卿参列之由、)

外弁公卿らは陣座に控えていたが、開門や闔司の着座の後、月華門より参入し宜陽殿の土庇に列立した。南庭ではなく宜陽殿土庇に列立したのはこの儀式が「雨儀」で行われたからである。またここには外弁幄の記載は認められないが、通常は設定されており、月華門南土庇、月華門の南廊がこれに充てられていた²¹⁾。闔司の着座位置についても特には記されないが、前の検討からしても月華門内に設けられたとみて誤りがないだろう。月華門を用いた節会について諸例を検討するとこれらに共通するのは「雨儀」の場合であった点である。

「立后」についても「雨儀」の例が存在する。延宝度内裏に於いて宝永5年(1708)2月27日に行われた幸子立後の場合を『通誠公記』に見ると、この儀は、晴作法に対し「雨儀」で行われており、公卿らの動きは「元日節会」等の場合と全く同様であったことが知られる。

表-1は本章で扱った慶長度、寛永度、延宝度、宝永度の各内裏について、公卿らの参入門が知られるものを整理し示したものであり、図-4は承明門と月華門の場合について、公卿らの南庭への参入経路を併せて示したものである。「雨儀」の場合は晴の場合に対し雨に濡れない様な短い距離をと配慮された結果なのであろう。

以上の様に、これらの近世内裏に於いては「元日節会」を初めとする諸節会や「立后」「立太子」等が行われていたが、通常の言はば「晴儀」の場合は承明門が、「雨儀」の場合には月華門が公卿らの参入門として使われていた。「雨儀」の場合は「晴儀」に対し、公卿らは南庭ではなく宜陽殿土庇に列立するなど、本来の方式に対し、略式の性格を有したと考えて良く、承明門と月華門はこのような観点から使い分けられていた。平安宮の場合、公卿らはこれら儀式に於いて「晴儀」「雨儀」の違いにかかわらず、承明門より参入していた。

第2章 慶長度内裏に於ける南門復活の要因

慶長度内裏等の近世内裏に対し、それ以前の中世内裏には南門が存在しない。本章では、これら内裏の門の用法を明らかにすることにより、慶長度内裏等に於いて南門が設けられる様になった理由について考えてみたい。ここで扱うのは、やはり得られた史料の関係より鎌倉

図-3 慶長度内裏指図(部分)

図-4 承明門・月華門より参入する公卿の経路(慶長度内裏)

期の建暦度・建長度の閑院内裏、南北朝期の応永度・康正度の土御門東洞院内裏と、平安末期の例ではあるが、やはり南門が設けられなかった土御門烏丸内裏である。

土御門烏丸内裏は、平安宮内裏を忠実に模して造営したとされる。紫宸殿廻りを見ると、南庭をはさんで東側に宜陽殿、春興殿を西側に校書殿、安福殿を置き宜陽殿と春興殿の間には日華門を、校書殿と安福殿の間には月華門を開くが、南門としての承明門は設けられなかった²²⁾。土御門烏丸内裏でも平安宮内裏と同様「元日節会」を初めとする諸節会や「立后」「天皇元服」など様々な儀式が行われていた。「踏歌節会」について『台記』康治3年(1144)正月16日条に

承明門(以日華門、用之)

とあり、また「豊明節会」について同記久安3年(1147)11月20日条に

依無承明門、以日華門用之、

とされるように、この内裏に於いては日華門が承明門の役割を果たしている。この内裏は平安宮内裏に倣い陣座が紫宸殿の東に設けられたから²³⁾、儀式時には東の日華門が使われたのである。表-2は土御門烏丸内裏に於いて公卿らがこの門より参入或いは参入したと推定される儀式について整理したものである。例えば「元日節会」について『中右記』永久6年(1118)正月1日条は、

内大臣以下着左仗座…(中略)…右大□敷政(…割註略…)門着外辨座…(中略)…開門(以東中門擬承明門也)内辨召舍人、大舍人稱唯、少納言宗兼替外辨右大將以下起座列立在中門外、召後列立前庭、

とし、公卿らは仗座(陣座)を起って外弁座に着き、開門の後、承明門とされた東中門より南庭に参入したことを示している。但、ここでは日華門を東中門と記している。闔司の着座については特に記されないが当然あったものと思われ、例えば「踏歌節会」を記した『台記』康治3年(1144)正月16日条に

開門、闔司着

とされる他、同様の記載を諸記録に見ることが出来る。

「立后」については、「雨儀」の例のみ知られるが、外弁に着いた公卿らは、開門、闔司着座の後、(承明門としての)東中門より入り、宜陽殿壇上に列立した。宜陽殿壇上に列立したのは「雨儀」のためである。闔司の座の位置については諸記録を検討しても特に記されないが、前章での検討により承明門としての日華門内に設けられたとして誤りはないだろう。節会については「雨儀」の例が多い(表-2参照)が、公卿らの参入する門は晴の場合と異ならない。

鎌倉期の建暦度・建長度の閑院内裏について、紫宸殿廻りを見ると、土御門烏丸殿とほぼ同様の構成であった²⁴⁾。やはり南門は設けられず、宜陽殿と春興殿の間の東中門は日華門に、校書殿と安福殿の間の西中門は月華門にあてられている。この内裏でも「元日節会」を初め

表－1 慶長度内裏等に於ける公卿らの参入門

内裏名	西暦	和暦	儀式名	使用した門	備考	出典
慶長度内裏	1616	元和2.正.7	白馬節会	承明門	雨儀	齊藤守記抄
	1619	元和5.正.7	白馬節会	承明門	雨儀	〃
	〃	〃	白馬節会	承明門	雨儀	〃
	1621	元和7.正.7	白馬節会	承明門	雨儀	涼院院記
	〃	〃	白馬節会	承明門	雨儀	〃
	1622	元和8.正.1	白馬節会	承明門	雨儀	〃
	〃	〃	白馬節会	承明門	雨儀	〃
	〃	〃	白馬節会	承明門	雨儀	〃
	1630	寛永7.9.12	御即位	承明門	雨儀	寛永御即位記略
	〃	〃	〃	〃	〃	〃
寛永度内裏	1643	寛永20.10.21	御光明天皇即位	南門	雨儀	本深自性院記
延宝度内裏	1683	天和3.2.14	立后	承明門	雨儀	義禪公記
	1684	天和4.正.1	立后	承明門	雨儀	通見公記
	〃	〃	立后	承明門	雨儀	〃
	1686	貞享3.正.1	立后	承明門	雨儀	〃
	〃	〃	立后	承明門	雨儀	〃
	1687	貞享4.正.16	立后	承明門	雨儀	〃
	〃	〃	立后	承明門	雨儀	〃
	1689	元禄2.正.1	立后	承明門	雨儀	〃
	〃	〃	立后	承明門	雨儀	〃
	1690	元禄3.正.16	立后	承明門	雨儀	〃
	1692	元禄5.正.2	立后	承明門	雨儀	〃
	〃	〃	立后	承明門	雨儀	〃
	〃	〃	立后	承明門	雨儀	〃
	1708	宝永5.2.27	立后	承明門	雨儀	〃
宝永度内裏	1710	宝永7.11.11	御即位	南門	雨儀	御即位記
	1725	享保10.正.7	御即位	南門	雨儀	通見公記
	1726	享保11.正.1	御即位	南門	雨儀	〃
	1727	享保12.正.1	御即位	南門	雨儀	〃
	1728	享保13.正.1	御即位	南門	雨儀	〃
	〃	〃	御即位	南門	雨儀	〃
	1729	享保14.正.1	御即位	南門	雨儀	〃
	1730	享保15.正.1	御即位	南門	雨儀	〃
	1732	享保17.正.16	御即位	南門	雨儀	〃
	1734	享保19.正.1	御即位	南門	雨儀	〃
	1735	享保20.正.1	御即位	南門	雨儀	〃
	〃	〃	御即位	南門	雨儀	〃
	〃	〃	御即位	南門	雨儀	〃
	1738	元文3.11.20	御即位	南門	雨儀	吉忠公記
	〃	〃	御即位	南門	雨儀	松町辰日節会
	1740	元文5.11.24	御即位	南門	雨儀	通見公記
	1741	元文6.正.7	御即位	南門	雨儀	〃
寛政度内裏	1794	寛政6.3.7	立后	承明門	雨儀	欣子内親王立后記
	1844	天保15.3.25	立后	承明門	雨儀	鳥太子御元服次第
	1847	弘化4.9.23	立后	承明門	雨儀	御即位次第
	〃	〃	立后	承明門	雨儀	〃

とする諸儀式が行われ、公卿らの参入口として日華門が用いられた。この門について前と同様の観点から整理したものが表－3である。「雨儀」の例が多いが、例えば「白馬節会」について『民経記』嘉禄元年(1225)正月7日条を見ると、

次上卿著外弁、…(中略)…次上卿入日花門代

と記される。参入にあたり開門され、また閤司が着座したのは『広橋家記録』²⁵⁾承久4年(1222)正月7日条他に見える通りである。節会のみならず「天皇元服」にも日華門が使われたが、『天皇元服部類記』²⁶⁾承久4年(1222)正月3日条からは閤司座の位置も知ることが出来る。

次閤司分居日花門内

即ち、閤司座は日華門内に設けられた。この様に閑院内裏に於いても「晴儀」「雨儀」にかかわらず、日華門が使われたのである。

ところで、閑院第の日華門はこれら儀式では承明門としての役割を果たしたと思われる。と言うのも、度々述べてきたように、また後にも触れるように閤司座は本来承明門内に設けられるべきものであったからであり、また第4章で述べるように、平安宮内裏に於いては「元日節会」を初めとする節会や「立后」「立太子」「天皇元服」等は承明門を用いるのが定式であったからである。『爲政録』²⁷⁾建保3年(1215)正月1日条は閑院内裏での「元日節会」についてやはり「雨儀」の場合ではあるが、

内辨昇殿開門閤司如例、少納言顯平於宜陽殿砌就版云々、此事不得心、擬承明門垣者可在中門歟、召了群卿列立宜陽殿庇中、とし、(東)中門が承明門として理解されていたことを示している。

室町期に営まれた応永度、康正度の土御門東洞院内裏は敷地の西面が東洞院大路であった関係上、ここに四足門を開いている。紫宸殿廻りについて見ると、応永度、康正度ともに変わらず、東に春興殿、西に宜陽殿を配し、またそれぞれの南に連続させて日華門、月華門を開いている²⁸⁾。南門はやはり設けられていない。本来東に置かれるべき宜陽殿が西にあるのは、この内裏が「西礼」だったからである。従って日

表－2 土御門烏丸殿に於いて承明門代(日華門)より公卿らが参入した儀式

西暦	和暦	儀式名	備考	出典
1118	永久6.正.1	元日節会	雨儀	中右記
〃	〃	〃	雨儀	中右記
〃	〃	〃	雨儀	中右記
〃	〃	〃	雨儀	中右記
〃	〃	〃	雨儀	中右記
1119	元永元.正.26	元日節会	雨儀	中右記
1133	元永元.正.26	元日節会	雨儀	中右記
1144	治久3.正.16	元日節会	雨儀	中右記
1147	久安3.11.20	元日節会	雨儀	中右記

表－3 閑院内裏に於いて承明門代(日華門)より公卿らが参入した儀式

西暦	和暦	儀式名	備考	出典
1215	建保3.正.1	元日節会	雨儀	爲政元服部類記
1222	承久4.正.3	元日節会	雨儀	爲政元服部類記
1225	嘉禄元.正.7	元日節会	雨儀	爲政元服部類記

表－4 土御門東洞院内裏に於いて承明門代(月華門)より公卿らが参入した儀式

西暦	和暦	儀式名	備考	出典
1406	応永13.正.7	元日節会	雨儀	流唐公記
1417	応永24.正.3	元日節会	雨儀	流唐公記
1433	天永2.正.1	元日節会	雨儀	流唐公記
1490	延徳2.正.1	元日節会	雨儀	流唐公記
1494	明応2.正.1	元日節会	雨儀	流唐公記
1517	永正14.正.1	元日節会	雨儀	流唐公記
〃	〃	〃	雨儀	流唐公記
1518	永正15.正.1	元日節会	雨儀	流唐公記
1522	文永2.正.7	元日節会	雨儀	流唐公記
〃	〃	〃	雨儀	流唐公記

華門ではなく月華門が儀式時の参入口として用いられた。表－4は前と同様に土御門内裏に於ける月華門についての用例を一覧にしたものである。

「元日節会」の例を『二水記』²⁹⁾永正14年(1517)正月1日条に窺うと、

子刻許節會始也、先右府著仗座之端(…割註略…)次久我以下次第著座、…(中略)…上首承自(且力)、次第起座、經床子座之前(…割註略…)著外辨座、…(中略)…外辨座、月華門南廊後、北上西面構之…(中略)…綾寄裾仰開門(其詞、開門仕レ)此時衛士扣月花門打拍(三度)了陣官人申之由(詞、開門仕タリ)、次内辨仰閤司(詞、一ハ罷寄ヌヤ)…(中略)…次外辨人次第自下謁人離屬列進出…

とあり、また「天皇元服」を『天皇元服部類』³⁰⁾永享5年(1433)正月3日条に見ても

天皇着靴着御椅子、先之内府以下着靴着外弁、次開門、次閤司分居、次自内府次第外弁座、入月華門列立標下(東上北面異位重行)

とされるように公卿らは外弁座から開門を待ち月華門を経て、南庭に入った。閤司座は土御門烏丸内裏や閑院内裏と同様、月華門内に設けられたものと思われる。表－4に見るようにこの内裏でも晴の場合と「雨儀」の場合とでは用いる門に相違は認められない。この様にこの土御門東洞院内裏でも儀式時には月華門が承明門として使われたものと考えられる。

以上、土御門烏丸内裏、閑院内裏、土御門東洞院内裏を取り上げ、儀式時に於ける門の用法を明らかにしてきたが、日華門もしくは月華門が使われ、これが平安宮の承明門の役割を果たしていたことが知られた。後述するよう平安宮に於いては閤司座は承明門内に置かれ、また開門は承明門に対して行われたことがこれを裏付けている。即ち、「元日節会」を初めとする諸節会「立后」「天皇元服」の際にはこれらの門が使われていたが、換言すれば、これらの儀式はこれら内裏に於いては敢えて南門を用いずに済んできた儀式とも言える。これら儀式は後述する様、そもそも平安宮内裏では承明門を参入口として行われた儀式であった。

図-5 土御門殿之儀御即位差図
但し、一部字を拡大し書き入れている

ところが、康正度の土御門東洞院内裏で、公卿らの参入する門の用法に大きな変化が生じる事になる。大永元年(1521)3月22日、後柏原天皇の「即位式」がこの内裏で行われることになった。『御即位次第』³¹⁾をこれに参加した公卿らの参入経路に着目し見ることにしよう。

此間外辨御相以下著幄(北上西面)、…(中略)…吉時至時、且著御高御座、…(中略)…次開門…(中略)…次外辨公卿立幄座、入自南門代著版位、…(中略)…次五位已上依次自南門代参上、…(中略)…次式部率六位已下刀禰、左右相分入自同門、…(中略)…次式兵兩省引率紋人、入自南門代左右相分就列、

幸い『土御門殿之儀御即位差図』と題する当日の様子を描いた図面(図-5)³²⁾が伝わるので具体的な様子が知られるが、銅馬、日形、月形などの旗やこの儀式に必要な宣命版などが置かれた前庭の南端に南門代が設置されている。外弁公卿は、宜陽殿西側の床子座を起ち、月華門西南方の外弁幄座に一旦控えた後、庭中の南門代より参入したのである。

周知のように「即位式」は平安宮の大極殿を主会場として行われてきた。陽成天皇の際には大極殿が焼失していたため豊楽院が³³⁾、また冷泉天皇の時には御不例により内裏が³⁴⁾、そして後三条天皇の場合は、大極殿、豊楽院、内裏が焼失していたため太政官庁が使われた³⁵⁾以外は一貫して大極殿が主会場となってきたのである。しかし、平安末期の安德天皇の時にはやはり大極殿、豊楽院が焼失していたため、様々な議論の末に内裏が会場として使われている³⁶⁾。この後、大極殿、豊楽院は再建されず、後鳥羽天皇の際(1184年)には後三条天皇の例に倣って太政官庁が使われたが³⁷⁾、これ以降中世期を通じこの太政官庁が即位の場として定着することになる。この状態がしばらく続いたが、応仁の乱の後、太政官庁が廃止となったため『実隆公記』文龜元年(1501)3月29日条に

無官廳之間於紫宸殿可被行之否事

とあるように、後柏原天皇の即位を康正度の土御門東洞院内裏で行う提案がなされた。そして永正8年(1511)の修理を経て、上述の大永元年(1521)3月22日の「即位式」となったのである。『二水記』によれば、これに先立つ3月3日、

今日御即位南門代柱立之、其外四神旗柱等各立之、明日入土用之間、

今日立之了、

とされる様に、南門代の柱が庭中に立てられている。

ところで、上述の様に「即位式」は大極殿を主会場として行うのが定式であった。門の用法の点からこの式を見ると以下の様になる。三位以上の公卿は東西の朝集堂に参集する。天皇が小安殿に着御の後、会昌門等が開門され、公卿らは会昌門より朝庭に参入する。また五位以上、六位以下も続いてこの門より参入し列立する。天皇は大極殿の高御座に着き、宣命が読まれる。その後公卿以下は退出する³⁸⁾。公卿以下は朝庭に左右対称の位置に列立し、また南北中心軸上にある南門・会昌門が重要な役割を果たしていたことが知られる。会昌門、応天門の外には、衛門がそれぞれ陣を敷いた。公卿以下は廻廊で囲まれた儀式空間に外部から参入したのである³⁹⁾。

太政官で行われた場合も同様で、南門が参入門として使われた。またその南の民部省南門が応天門に想定され、その外側には衛門陣が配される等、南門諸門が重要な役割を果たしている。ここに於いても公卿らは南門外に設けられた朝集堂に相当する外弁幄より前庭に参入したのである⁴⁰⁾。

平安宮内裏を会場とした安德天皇の例を『安德天皇御即位記』⁴¹⁾にみると、公卿らは南門たる承明門の外側東方に設けられた外弁幄からこの承明門を通り、南庭に参入した。承明門外には兵衛陣、その南の建礼門外には衛門陣が置かれている。

「即位式」は節会等の年中行事と異なる一世一度の大礼であり、銅鳥、日像、月像幢などを林立させて行う極めて形式を重んじる儀式であった。従って、例え式場が変わったとしても公卿らの参入口として南門の存在は欠くべからざるものであったと思われる。

康正度の土御門内裏では、後柏原天皇の他、後奈良天皇、正親町天皇、後陽成天皇の「即位式」が行われている。これらのうち、門が知られるのは正親町天皇の場合であるが、やはり南門(代)が使われていた⁴²⁾。康正度内裏で南門が使われたのは、これら「即位式」に於いてのみであった。上掲『二水記』が言うよう南門代は「即位式」のために建てられたのである。

永祿度の修理を経、次いで秀吉により造営された天正度内裏にはやはり南門が存在しなかったとされるが⁴³⁾、後水尾天皇の「即位式」では同様、南門代が使われている⁴⁴⁾。この様に康正度土御門内裏以降「即位式」を内裏で行うことが定着したのであった。

次の慶長度内裏では以上の様な背景をもとに本格的な南門が建設されたものと思われる。しかしこの南門も「序」で紹介した様に独特の性格を持っていた。この点について若干の検討をするため再び康正度土御門内裏の「即位式」を見ることにしたい。

後柏原天皇の「即位式」に先立つ文龜元年(1501)閏6月28日、『後法興院記』はこの件について以下の様に記している。

一堂下御装束事旗幟帷屋等數多可立之間南庭狹少可爲如何様哉、仍壞南築垣、立南門代、如本式、外辨幄、外衛陣等可被構門外哉事

即ち南築垣を壊して南門代を立てることが述べられているが、注目されるのは外弁幄を門外に設けるべきとする点である。換言すればこれは外弁の公卿は南門の外から参入すべきことを示している。然しながら実際は前に述べたように外弁幄は南門外には設けられなかった。公卿の参入路に関し、前掲『土御門殿之儀御即位差図』は床子座から外弁幄に至る経路について、

考北山抄旧次第等此道不審⁴⁵⁾

とし疑問を呈したのはこのことだったのであろうか。

慶長度内裏では「即位式」が可能なように南門を設けたが、この南門は築地外より参入すべき性質の門であるため、脇に穴門を設け、一旦外に出る形式をとったものと思われる。本来公卿らは、西面築地に開かれた四脚門より外部に出、外弁幄に着いてから改めて南門より参入すべきであった。築地内で公卿らの経路を完結させようとしたためこの様な形式の南門となった。そしてこの南門は節会等の参入口としても使われたのである。

第3章 寛政度内裏の承明門と日華門

宝永度内裏の焼失後、裏松光世の『大内裏図考證』をもとに形式復古が企てられた寛政度内裏の紫宸殿廻りの構成は以下の様である。即ち紫宸殿の東側に陣座と宜陽殿を配し、これに連続する廻廊で南庭を囲む。この廻廊の南、東、西面にはそれぞれ承明門、日華門、月華門を開く(後掲図-8⁴⁶⁾参照)。陣座、宜陽殿が慶長度内裏等に対し東側に置かれたのは、平安宮内裏に倣ってのことであろう。従って儀式時に於ける公卿らの参入口として承明門はもちろんのこと、日華門が重要な役割を果たした。また注目すべきは、廻廊の外側に廻らされた築地南面にも南御門が開かれたことで、これを仮に建礼門に見立てると平安宮内裏と同様、二重の郭が形成されているように見える。ここでは前の慶長度内裏等と同様、承明門と日華門を用いた儀式について検討することにする。この内裏については「元日節会」「立后」「立太子」「即位」「皇太子元服」についての記録が知られる。

まず、承明門についてであるが、「元日節会」がこの門を参入門として用いている。『元日節会備忘並當時敷設図』⁴⁷⁾にはその次第と敷設が示されている。公卿らに着目し参入までの経路をみると、

群卿着座、…(中略)…次群卿起座、此間暫着鳥曹司、群卿着外弁、…(中略)…次開門…(中略)…次関司分居…次内弁宣召大夫達、少納言称唯出召之、群卿列立標(入承明門東間東扉異位重行)

とあって、公卿らは陣座を起ち、鳥曹司に向かい次いで外弁座に着いたが、開門、関司着座を待って、承明門より参入したことが知られる。この史料は陣座の図を始めとする詳しい敷設図を数多く収録するが、図-6は鳥曹司代と外弁座を、図-7は承明門を描いたものである。鳥曹司は廻廊の東南角の外側に、外弁座はその西側にやはり廻廊の外側に設けられていた。また承明門内左右には関司座が置かれた。『元日宴會鋪設圖草』⁴⁸⁾にもほぼ同様の指図が納められている。これら敷設図には「雨儀」の場合のそれも描かれるが、屋外での次第が屋内に移ったのみで、使う門に変化は認められない。

「立后」でも承明門が使われている。『欣子内親王立后記』⁴⁹⁾によれば、寛政6年(1794)3月7日に行われたこの式について、

卯刻許右大臣・權大納言實祖・飛鳥井中納言・左大辨宰相親定、等参伏座、…(中略)…諸卿著外弁…(中略)…次開門(開承明・建禮等門、)次関司相分著草整…(中略)…少納言信昌朝臣就版、(依雨儀立承明門壇上、)召刀禰、外辨權大納言・源大納言前秀、權中納言資矩・飛鳥井中納言・右衛門督隆師・左大辨宰相等列標下、(依雨儀宜陽殿西廂立標、北上西面、)…(中略)…宣制一段

とあり公卿の経路は「元日節会」と全く同様であったことが知られる。ただ、この場合は「雨儀」で行われたため、公卿は南庭ではなく宜陽殿西庇に列立した。

「立太子」については『俊矩記』⁵⁰⁾に文化6年(1809)3月24日に行われた恵仁親王の例が記されるが、やはり外弁に着いた公卿が開門、関司着座の後参入し、標下に列立した。承明門を用いたとの明確な記載

図-7 承明門の敷設
(『元日節会備忘並當時敷設図』)

但し、一部字を拡大し書き入れている

図-6 鳥曹司代と外弁座
(『元日節会備忘並當時敷設図』)

但し、一部字を拡大し書き入れている

図-8 承明門・日華門より参入する公卿の経路(寛政度内裏)

は無いが、公卿らが外弁座より参入したことが知られるから、この門より参入したと見て誤りが無いだろう。

「即位式」に於いても承明門が使われている。寛政度内裏焼失の後建てられた安政度内裏は寛政度のそれと殆ど同じ規模を有していたが⁵¹⁾、「即位式」についてはこの寛政度内裏での例が知られる。『御即位次第』⁵²⁾に、弘化4年(1847)9月23日に行われた孝明天皇の例が記されている。前と同様、公卿に着目し、次第を追うと、

閣外卿相以下着幄(當鳥曹司代南方南北行立幄為外弁座)…(中略)…門部開承明門諸門共開…(中略)…参議以上依次起幄座就列参入…(中略)…五位以上依次自承明門参入…(中略)…式部率六位以下刀祢左右相分入自同門…(中略)…皇帝服冕服即高座…(中略)…宣制云、

となる。公卿らは鳥曹司の南方の外弁幄を起ち承明門より参入した。五位以上、六位以下も承明門より入っている。また、この承明門外の左右には兵衛陣が、そして建礼門代とされた南御門⁵³⁾内の左右には、衛門陣が置かれた。

扱て、日華門を参入口とした儀式について検討しよう。「皇太子元服」に日華門が使われている。「皇太子元服」は天皇の御座す紫宸殿での皇太子の理髪・加冠と、その後の節会とから成るが、公卿らが参入するのは節会からである。『皇太子御元服次第』⁵⁴⁾には、天保15年(1844)3月25日の皇太子統仁の例が記してある。

次公卿着伏座…(中略)…次公卿起座…(中略)…天皇更御南殿…(中略)…次皇太子参入進南廂當御座令謝座給…(中略)…次皇太子着御御倚子、次公卿入日華門列立南庭(版位東公卿一列殿上人一列北面西上)謝座再拜…(中略)…次公卿謝酒再拜禰亮進出取空盞退、次公卿次第離列經軒廊昇東階参上着座

公卿らは陣座を起ち、日華門より南庭に参入列立、ついで紫宸殿上の饗座に着いた。但ここでは承明門より参入した儀式で見られた開門が

図-9 承明門・日華門を用いた王卿の経路
(「日本建築史図集」日本建築学会編をもとに作製)

行われず、また閤司の着座も見られない。

図-8は、承明門と日華門の両例について、公卿らの参入経路を示したものである。

この様に、寛政度内裏に於いては、承明門と日華門は儀式の種類により使い分けられていた。「即位式」を除けば実はこの使い分けは平安宮内裏の場合と同様であり、儀式の遂行に関しても復古が意図されたものと見ることが出来る。然しながら、復古が図られた寛政度内裏の紫宸殿廻りの形式とは門の用法から見た時一体どの様なものだったのだろうか。

第4章 近世内裏の空間的秩序

本章では、儀式時に用いられた承明門と日・月華門の性格をもとに近世内裏を空間的秩序の点から考えることにするが、その前に平安宮内裏ではこれらの門がどのような性質を有し、またこの点から見た時に平安宮内裏の紫宸殿廻りはどのような空間的秩序を有していたのかを知る必要があるだろう。前論⁵⁾に基づき概説することにする。

周知のように平安宮内裏は内郭と外郭の二重の郭によって囲われていた。紫宸殿の東前方には宜陽殿、春興殿を、西前方には校書殿、安福殿を配していたが、宜陽殿と春興殿の間には日華門を、校書殿と安福殿の間には月華門を開き、紫宸殿の対面の内郭廻廊には南門としての承明門を開いていた。承明門は内郭に対し開かれた門であり、日・月華門は内郭内部の門である。また外郭には南門として建礼門が設けられている。平安宮内裏では様々な儀式が行われていたが、公卿らの南庭への参入口に着目すると、承明門を用いる儀式と日華門を用いる儀式とに大別される。前者には五位以上が参加する「元日節会」を始めとする諸節会や「天皇元服」と、六位以下も参加する「立太子」「立后」「任官式」「譲位」があり、後者には「皇太子元服」「天皇御賀」があった。即ちこれらの門は儀式の種類により使い分けられていたのである。図-9はこれらの参入経路を示したものである。前者では公卿らの参入に際し、式次第の一つとして開門(儀)とも言うべきものがあり、この後、閤司が承明門内の両脇に座を占めている。然しながら後者に於いてはこれらを認めることが出来ない。閤司(女官)は承明門内に着座したが、これは内裏内郭がそもそもは天皇の専有空間であったことを示している。承明門は本来、建礼門と対になって用いられ、あるいは用いられることを前提とした門で、客人(まればと)の役割を果たす外弁の公卿らが外部から内裏内郭に参入するための門であり、日華門は公卿が陣座から起つことに見られるように内裏内郭内で完結する内輪の儀式のための、主催者側が用いる門であった。この様に平安宮内裏で

図-10 承明門を用いた王卿の参入路及び節会等に於ける退出の経路
(「日本建築史図集」日本建築学会編をもとに作製)

は外郭、内郭、二重の郭による構成をもとに、内郭内にさらに門を開くことによって言はば三重の質の異なる同心円的な空間的秩序を形成し、異なった種類の儀式に対応していたのである。

然しながら、平安期に於いてもやがて承明門より参入する場合の経路に変化がおり、公卿らは内郭内の陣座を起ち宜陽門を経て内郭外に出、ついで内郭東南角の鳥曹司に入り、また、その西方の外弁座に控えた後、再び承明門から内郭の南庭に参入するようになる(図-10参照)。ここに建礼門の使用は形骸化した、内郭の外より参入するという原則は守られている。この様な変化の要因として天皇の専有空間内にある陣座に公卿らが控える「内裏侍候」の成立があげられるが⁶⁾、このことが建礼門と対になって外部から参入するために使われる門という承明門の性格を弱めることになり結果的に中世内裏の南門消失に結びつくと思われたのである。

扱て、この様なことを念頭に置き近世内裏について考えてみよう。

まず、慶長度内裏等の門について言えば、承明門と月華門は晴(儀)の場合と「雨儀」の場合で使い分けられ、平安宮でのように儀式の種類によっていたのではない。言はばこれらの門は正式と略式の関係にある。承明門が正式の門としての性格を与えられたのは、この門が「即位式」のための門として復活したということが意識されていたためかもしれない。一方、公卿らの参入経路を見ると、いずれの場合も陣座から起つてはいるが、承明門の場合は不完全ではあるものの一旦築地外に出、改めて外部から参入するという方式を採っている。これに対し月華門の場合の公卿らの経路は築地内で完結している。即ち承明門は外部からの参入門、月華門は内輪の門という性格を有している。この様な点から見ると、これらの内裏の紫宸殿廻りは平安宮のような同心円的な配置形式を採っていないものの、承明門・月華門の性格は平安宮に類似し、実質的には質の異なる二重の空間的秩序を形成していたということが出来よう。その場合、築地が平安宮の内郭に相当する。

但し、閤司座が設けられた門内が天皇の専有空間であるとの観点に立てば、承明門内或いは月華門内、即ち築地が囲む領域、或いはその内部内の宜陽殿や日・月華門で囲まれた領域いずれもがこれに該当することになり、そもそもの天皇の専有領域が曖昧となる。

次に寛政度内裏について見ると、承明門と日華門は儀式の種類により使い分けられており、この点については平安宮に準じている。一方、公卿らの参入経路を見ると、やはりいずれも陣座を起ち、承明門、日華門にかかわらず廻廊外の、しかし築地内より参入するという点に於いては一致している。寛政度内裏は一見すると同心円的な配置形式を採っているが、実は平安宮の承明門廻りの築地と、日・月華門両脇の

宜陽殿などを一続きの廻廊で強引に結んだものと考えられる。このような点から見ると承明門、日華門の性質は平安宮とは異なり、平安宮の様な空間的秩序は形成されていないことになる。また閑司座に着目すると、承明門内が天皇の専有空間ということになるが、同じ廻廊に開かれた日華門にはこれが設けられなかったから、その領域はやはり曖昧となる。

承明門、日華門の性格から見ると、近世内裏は以上の様な空間的性質が認められる。即ち、慶長度内裏等の紫宸殿廻りは形式的には平安宮の場合と異なるが平安宮に準じた空間的秩序を実現しようとしたものであり、寛政度内裏は形式的には平安宮に倣った様に見えるがそれとは全く異なる空間的秩序を形成していたのであった。

南門を設けることによる天皇の専有領域の曖昧性が近世内裏の特質であり、そもその原因は前論で論じた平安期に於ける公卿の「内裏侍候」の成立にまで遡るのである。

結

以上、本論では近世期内裏の承明門、日・月華門の用法と性格を明らかにしてきた。またこれらの点から慶長度内裏での南門復活の要因と近世期内裏の紫宸殿廻りの空間的な秩序について考えてきた。

慶長度等内裏の承明門と月華門は正式と略式の性格の違いを持ち、

註

- 1) 藤岡通夫：京都御所、彰国社、昭和31年7月、なお、本論で扱う近世内裏の配置構成については本書によるところが大きい。
- 2) 桜町天皇大嘗会辰日節会絵巻：茨城県立歴史館蔵。
- 3) 藤岡通夫、前掲書所収の図をもとに書き直したもの。
- 4) 東北大学附属図書館蔵・狩野文庫。
- 5) 『左大史匡遠宿禰記』文和元年(1352)8月17日条に、土御門東洞院殿南北四足(方カ)一町西礼皇居也、とある
- 6) 飯淵康一、永井康雄、吉田欽：平安宮内裏承明門・日華門の儀式時に於ける性格。日本建築学会計画系論文集第534号、2000年8月。
- 7) 『大日本史料』第12編之30所収。
- 8) 割註の部分は()で示す 以下同じ。
- 9) この節会では、花山院大納言定親が儀式の進行を掌る内弁の役割を果たし、三條大納言公廣以下の公卿がこの儀式に参加する外弁の役割を果たしている。
- 10) 『即位庭上絵図』中井家文書の研究九、中央公論美術出版、昭和59年2月。
- 11) 『元日宴會鋪設図草』、『元日節会備忘並当時敷設図』、宮内庁書陵部蔵
- 12) 『天皇元服部類記』承久4年(1222)正月1日条
- 13) 平安宮を含め他の内裏について閑司着座の記録のある例はすべて、公卿らが南庭に参入する門内に設けられており、これ以外の例を認めることは出来ない。この着座が常に開門と対になって記録されるのは、この事を如実に示している。慶長度内裏に於いても閑司の着座の位置はこの門以外の場所と考えられず、これから述べる他の内裏についても全く同様である。
- 14) 前掲註6)論文。
- 15) 『皇室制度史料 后妃二』所収。
- 16) 『通兄公記』同日条。
- 17) 東北大学附属図書館蔵・狩野文庫。
- 18) 寛永度内裏の例ではあるが後光明天皇に関して『本源自性院記』寛永20年(1643)10月21日条 延宝度内裏について東山天皇に関して『通誠公記』貞享4年(1687)4月28日条 宝永度内裏について、桜町天皇に関して『吉忠公記』(『歴代残欠日記』)享保20年11月3日条。いずれも月華門より入ったとの記述は見られない。但し、東山天皇の場合は公卿らが脇門を入り、さらに南門を用いたとの記述があるが、この脇門は図-4に示す右脇門なのか、後述する穴門なのか不明である
- 19) 公卿らは宣制の後、禄所で禄を賜り退出するが、この禄所は『涼源院記』元和7年(1621)正月1日条に、向宣命拜、々畢テ向禄所、承明門ノ内、北[東ノ方イ]西向ニ長床子ニ着、とあるように承明門内の東方に設けられた。
- 20) 『中井家文書の研究 一』中央公論美術出版、昭和51年3月
- 21) 『資勝卿記抄』元和5年(1619)正月7日条。『涼源院記』元和8年(1622)正月7日条 『通誠公記』元禄2年(1689)正月1日条
- 22) 太田静六：寝殿造の研究、吉川弘文館、昭和62年2月 川本重雄：土御門鳥丸内裏の復元的研究、日本建築学会論文報告集 第335号、昭和59年1月

特に「即位式」には承明門が用いられていた。

中世期内裏では南門は正式には設けられなかったが、康正度内裏に於いてそれ以前は原則として行われなかった「即位式」のために急遽南門代が立てられている。慶長度内裏ではこの「即位式」に対応すべく南門が復活されたものと思われる。

寛政度内裏では承明門と日華門は平安宮内裏の場合と同様、儀式の種類により使い分けられていた。

慶長度等内裏の紫宸殿廻りは平安宮内裏のような同心円的な配置構成をとっていない。然しながら、承明門(南門)の脇に穴門を設けることにより承明門は外部より参入するための門として、また月華門は内部の門として機能する様計画され、実質的には同心円的な空間の秩序を形成していた。一方寛政度内裏の紫宸殿廻りは形式復古が企図され一見すると平安宮内裏の様に同心円的な配置構成をとっている。然しながら承明門と日華門が同じ廻廊に開かれ共に築地内で公卿らの参入経路が完結する点から見ると、これら両者の間に平安宮に見るような性格の違いは認められない。このような点から見ると寛政度内裏は平安宮内裏とは似て非なるものと言わざるを得ない。

「序」で紹介した宝永度内裏に於ける辰日節会の一場面は、外部より参入すべき門としての承明門の性格を端的に表現したものであった。

- 23) 『中右記』永久6年(1118)正月1日条、他。
- 24) 太田静六：前掲書。
- 25) 『大日本史料』第5編之1所収。
- 26) 『大日本史料』第5編之1所収。
- 27) 『大日本史料』第4編之13所収。
- 28) 藤岡通夫、註1)前掲書。
- 29) 『大日本史料』第9編之6所収。
- 30) 『群書類従』巻第九十八。
- 31) 『大日本史料』第9編之12所収。
- 32) 『大日本史料』第9編之12所収。
- 33) 『三代実録』元慶元年(877)正月3日条。
- 34) 『日本紀略』康保4年(967)年10月11日条。
- 35) 『扶桑略記』治暦4年(1068)年7月21日条。
- 36) 『玉葉』治承4年(1180)4月22日条。
- 37) 『後鳥羽院御即位記』(『続群書類従』巻第二百七十三)
- 38) 『貞観儀式』『北山抄』等による。
- 39) 拙稿：空間秩序から見た平安期貴族住宅の研究(私家版)、昭和60年、で制作した大極殿即位式推定復元図参照。また井上充夫：日本建築の空間(鹿島出版会、昭和44年6月)に「即位式」と類似した儀式構造を持つ「元正朝賀」の復元図が示してあり参考になる。
- 40) 溝口正人：中世即位式の空間構造、建築史の想像力、学芸出版社、1996年6月。
- 41) 『続群書類従』巻第二百七十二。
- 42) 『正親町院御即位略次第』(『群書類従』巻第九十一)
- 43) 藤岡通夫：註1)前掲書。
- 44) 『京都御所東山御文庫記録』
- 45) 但し、図-5では図面が縮小されているのでこの字は読みづらいものとなっている。
- 46) 註1)前掲書、所収の図面をもとに書き直し、書き入れたもの。
- 47) 宮内庁書陵部蔵。
- 48) 宮内庁書陵部蔵。
- 49) 『皇室制度史料 后妃二』所収。
- 50) 『古事類苑』帝王部所収。
- 51) 註1)前掲書。
- 52) 『歴代残欠日記』所収。
- 53) 南御門が建礼門代とされたとの明確な記載は無いが、南御門以外考えられない。
- 54) 『歴代残欠日記』所収。
- 55) 前掲註6)論文。
- 56) 平安宮での日華門より参入する儀式の成立は公卿の内裏侍候成立後ということになる。上掲註6)論文参照。

(2000年5月8日原稿受理、2000年8月10日採用決定)